HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語と中国語の対照から見たアイヌ語の時間表現 ： 中国語の「過」とアイヌ語の「a」を中心として [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	馬, 長城
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15069号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85479
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Changcheng_Ma_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　馬　長　城

審査委員
主査　教　授　佐　藤　知　己
副査　教　授　野　村　益　寛
副査　特　任　教　授　武　田　雅　哉

学位論文題名

日本語と中国語の対照から見たアイヌ語の時間表現

―中国語の「過」とアイヌ語の「a」を中心として―

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の第一の成果は、アイヌ語学において古くから知られてはいたが、長年、その記述的、理論的な位置付けが不明確であった助動詞「a」について、これまでの主要な学説を丁寧に整理し、問題点を明確化した上で、新しい観点からの分析を示した、という点にある。先行研究においては、「a」を日本語の「た」に類似した機能を持つ「過去」あるいは「完了」の助動詞として説明するのが一般的であったが、アイヌ語は英語などの言語と異なり、時制（テンス）を持たない言語であり、時制を持たないアイヌ語のような言語における過去、あるいは完了を表すとされる形式の言語学的な位置付けは、十分なものとは必ずしも言えない面があった。馬氏は、先行研究の整理と平行して、アイヌ語の大量のテキスト資料を分析し、従来の指摘を実証的に確認した上で、具体的には、「テキストレベル」という、先行研究ではこれまでほとんど考慮されていなかった新しい観点から考察を試み、これまで必ずしも明確には把握されていなかった助動詞「a」の機能として、テキスト内における「出来事の継起性」を明示する「タクシス機能」と呼ばれる機能を持つことを実証的に明らかにしている。特に重要なのは、「a」で文を終止することは通常許されず、後ろに接続助詞か終助詞を取る、あるいは名詞句を修飾する、という形式上の性質を示すことが先行研究において既に指摘されていたが、馬氏はこの性質をタクシス機能によって説明することを試みている。すなわち、後ろに継起を意味する接続助詞が現れる場合は、当然、「a」のタクシス機能が継起の接続助詞の機能と呼応していることを示している。しかし、さらに、馬氏は、一見、まったく異なる文脈であるために、先行研究では統一的な説明がなされていなかった、終助詞が後続する文脈、あるいは名詞句が後続する文脈も、「別の出来事の継起が構文的な特徴によって明示されている」という機能を共有していることを指摘し、助動詞「a」が、テキストにおける出来事の継起を示す、というタクシス機能を担う形式であることを統一的に説明しているのは大きな前進と言える。なお、馬氏は、後続要素を欠いているため、一見、この結論の例外とも見られる、助動詞「a」で終わる疑問文に関しても分析を進め、疑問のイントネーションが文の終結を確実に明示している、という特徴が、やはり「a」のタクシス機能と呼応する特徴であることを論証している。

本論文の第二の成果は、言語類型論、及び対照言語学の観点からも、アイヌ語の助動詞「a」の特徴を分析している点である。時制を持たないとされるアイヌ語において、テキスト構成上の機能を担うタクシス機能が重視されていることを確認した上で、馬氏はさらに、

馬氏の母語であり、また、アイヌ語と同じく時制を持たないとされる中国語においてもタクシス機能が重視される局面があるのではないか、という仮説に基づき、中国語の「過」という形式に着目する。「過」はアイヌ語の助動詞「a」と同様、中国語の先行研究において、理論的分析に諸説があり、統一的な見解が提出されているとは必ずしも言えない状況にあった。しかしながら、「過」については近年、タクシス機能にも注目した研究がなされつつあり、馬氏は「過」に関する先行研究を詳細に検討し、それらを援用しつつ、アイヌ語の助動詞「a」との対照研究を試みている。特に、既に先行研究において、中国語の「過」には大きく分けて二つの用法が分化していることが知られており、出来事の継起を示すもの（「過$_1$」）と、発話時点から出来事時点に焦点を当てるもの（経験）（「過$_2$」）とがあるが、アイヌ語の「a」と、より強く類似点を示すのは継起を示す「過$_1$」であり、両者ともに、通常は平叙文の文末に立ちにくい、という特徴を共有することを明らかにしているのは重要な指摘と言える。馬氏の研究によって、従来は関係付けて考えられることがほとんどなかったアイヌ語と中国語との間に、偶然とは考えにくい言語的な類似点のあることが実証的に示され、このことは、共にテンス（時制）を持たない言語であるアイヌ語と中国語との類型論的、対照言語学的研究が、今後、両言語の研究に有意義な視点をさらに提供する可能性があることを示唆するものと言える。

本論文のうち、重要な貢献を含む第 4 章と第 5 章の内容は、査読付き学術雑誌に論文として受理され、掲載されており、学術的に一定の評価を受けていることを附記する。

なお、審査の過程において、アスペクト現象のうち、タクシス機能面に考察が偏りがちで、他の一般的諸側面ももっと重視すべきではないか、特に継起的特徴を本来的機能とするための議論が若干不足しているのではないかという指摘がなされた。また、中国語の類似した機能を持つ「過」との対照研究は興味深いもので評価できるが、反面、膨大な蓄積のある中国語学の成果への目配りが必ずしも十分とは言えず、また、アイヌ語の「a」と中国語の「過」との差異が、両言語における、他のどのような言語的特徴と関連性を持つのか、さらなる踏み込んだ考察が必要ではないか、という意見が出された。口頭試問の結果、論文の内容に含めるには必ずしも至らなかったが、馬氏はこれらの点についても十分認識していることが確認できた。テンス（時制）を持たない、全く異なる言語同士の対照、という未開拓の研究課題を含むものであることを考慮すれば、これらの欠点は、ある意味、避け難いもので、その困難と取り組んで得られた重要な結果の価値を本質的に損なうものではない、と委員会としては判断した。

・学位授与に関する委員会の所見

以上の審査の結果、審査委員会は全員一致して、学位申請者に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。